

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第41回

アクセントへのこだわり、 なぜ？



イラスト・題字：長峯亜里

先日、英国に3年ほど暮らしている日本人女性と話していた時、彼女がふとこんなことを口にした。

「どうして英国では、コックニーみたいな強いなまりのある人たちが、標準語に直そうとしないんだろうね」

日本では地方から東京に出てくれば、意識的であれ無意識であれ、標準語に近づいていくのがごく普通だ。その感覚で英国社会を見ると、彼女の疑問はもっともに思える。日本人にとって「なまりを直すこと」は、適応や努力、成長の証として語られることが多いだけに、その違いは文化的な違和感にもなってしまう。

コックニーとは、ロンドン東部を中心に話され、歴史的に労働者階級の文化と結びついてきた英語のなまり(アクセント)を指す。独特の言い回しがあることで知られ、たとえば韻を踏む別の語に置き換える言葉遊びでは、「stairs(階段)」が「apples and pears(林檎と梨)」になる。ただし、現在のロンドンでこうした言い

回しを日常的に使う人はほとんどおらず、コックニーは都市の記憶や労働者階級の誇りを象徴する文化的記号として語り継がれている。

実際に多い話し方とは

ではロンドンに住む人はどんなアクセントで話しているのか。

最近の研究によれば、現在では主に3つのアクセントが混在しているという。まず、イングランド南部の標準的・中立的な英語で、いわゆる「容認発音(Received Pronunciation: RP)」を現代化したものだ。RPは伝統的に上流～中流階級と結びついてきたが、この標準英語は階級色が薄く、BBCニュースや英語教育など、公的で中立的な場面で用いられる。次が、テムズ川河口域に由来する「エスチュアリー英語」。労働者階級と上流階級が話す英語の中間に位置する。そして「多文化ロンドン英語」。移民の多い地域で生まれ、ジャマイカ英語やアフリカ系言語など300以上の言語の影響を受けた新しいア

コックニーの実例

コックニー	意味	由来	使用例
Adam and Eve	信じること	Believe → Adam and Eve (アダムとイブ)	I don't Adam and Eve it!
Bacon and Eggs	足	Legs → Bacon and Eggs (legsとEggsの押韻)	She's got a nice set of Bacons.
Butchers	見ること	look → Butcher's hook (肉屋の肉フック)	Let me take a Butchers!
China	親友	mate → China plate (陶器)	How are you, me old China?
Grass/supergrass	密告/密告者	Copper (警官) → Grasshopper (バッタ)	I think he grassed me up.
Lady Godiva	5ポンド	fiver → Lady Godiva (ゴダイヴァ夫人)	Can I borrow a Lady Godiva?
Porkies	嘘	Lies → Pork Pies (豚肉パイ)	He's telling Porkies.
trouble and strife	妻	wife → trouble and strife (面倒と争い)	The trouble and strife is calling me home.